

アラビア語を母語とする日本語学習者を 対象とした翻訳科目

——文法的な困難さを中心に——

ワリード・イブラヒム

[キーワード：①母語の影響 ②主語の人称と性 ③主題と語順 ④受け身形の使用目的 ⑤翻訳指導案]

0. はじめに

日本語とアラビア語は、文の構造も語彙の特徴も異なるうえ、言語そのものの発想やその言葉の背景にある文化が異なるのは言うまでもない事実である。そして、日本語教育の現場において、そのような相違がはっきりとした姿を見せるのは、翻訳を指導する授業である。なお、ここで取り上げる翻訳とは、ヤコブソン (Jakobson 1959/2004: p.139) が指摘する三種類の翻訳の中の2番目の「Interlingual Translation (言語間翻訳)」である。また、考察の対象にしているのは、プロの翻訳者養成のための講座ではなく、日本語日本文学専攻の大学生向けのプログラムの一環である翻訳の授業である。また、日本語からアラビア語への翻訳に限定する。

本稿では、アラビア語を母語とする日本語学習者向けの翻訳の授業で問題になる点を、具体例を挙げながら整理し、明らかにしたい。また、日本語教育の現場で10年余り、翻訳の授業を担当し、授業を進める中で実感してきた問題を取り上げたあと、このような問題をどう処理すべきかを提案する。基本的に翻訳の授業で問題になる点は、大きく「文法的なレベル」と「語彙・表現レベル」とに分かれるが、ここでは、文法的な問題を中心に上げることとする。

1. 学習環境の背景と翻訳授業の概観

現在、エジプトには、日本語専攻学科を設置している高等教育機関が三つある。それらの機関は、a「カイロ大学文学部」、b「アイン・シャムス大学外国語学部」、c「ミズル科学技術大学言語翻訳学部」¹⁾の三校であるが、bとcの機関は、外国語と翻訳専門家を養成する機関であるため、aの機関と比べて翻訳の授業が多い。また、翻訳の授業を受けるまでの過程は全ての機関において同様である。まず、学習者は仮名から日本語学習を始め、次に、日本語の基礎的な文法の学習を二年間で終えた後、三年目から翻訳

の授業を受けるという順序である。

授業の内容に関しては、翻訳の授業で用いられるアラビア語を母語とする日本語学習者向けの教材は一切なく、教師が課題を決め、教材を新聞やインターネットなどからピックアップする。従って、翻訳の授業で用いられるテキストには、綿密な計画性やテーマ性はなく、たとえば、「アラブの春」や「東北大震災」といった時事問題に関するテキストが多い。また、初級文法を終えた直後の3年生の学習者を対象にしている授業では、日本についての知識を広げる目的も兼ねて、日本社会や日本文化など、日本に親しみを持てるようなテーマが取り上げられる。それに対して、4年生向けの授業では、学習者の日本語力が多少上がってくるため、社会・経済・政治などの分野に関わる時事的な課題に加えて文学作品も取り上げることが多い。

授業の進め方としては、まず、課題を一週間前に提示し、学習者に予習させ、授業で翻訳を発表してもらう形で進める。そして、各自の発表内容についてクラス全員で検討する。また、クラスメートも同じ箇所を訳してきているので、自分の訳と明らかに違う場合は、その場で意見を述べ、それに対して、講師がさらに講評する。すなわち、ディスカッション形式で授業を進め、まず、学習者が訳し、それをクラスで検討し、最後に講師が講評という流れになっているところが多い。

このような授業形式で三つの日本語教育機関において授業が行われているが、翻訳の授業で頻繁に現れる文法上の誤りはほとんどの学習者に共通している。本稿では、そのような文法上の誤りから最も多く現れるものとして、①「主語の人称・性の問題」と②「文の語順と主題の位置」と③「受身形の訳し方」に関わる誤りの例を挙げながら、そのような問題をどのように処理すべきかを明らかにしたい。しかし、その前に、このような誤りが頻繁に現れる原因を明確にするために、次節では、本研究に関わるアラビア語の特徴の要点を押さえて、アラビア語がどのような言語なのかを簡単に紹介する。

2. アラビア語はどのような言語か

日本語からアラビア語へ翻訳をする際、アラビア語を母語とする日本語学習者に頻繁に見られる文法的な誤りを理解するために、学習者の母語であるアラビア語の全盤的な特徴に触れる必要がある。アラビア語は、形態面から屈折言語に分類される。すなわち、単語は、実質的な意味を表わす部分と文法的な意味を表わす部分とから成り、また、その二つの部分は融合しており、分離することができない。文法的な意味を表わす部分は、語形変化し、性・数・格・人称・時制を示す。子音が語の基本的意味を担い、語の語根である。その語根にどのような母音が挿入されるかによって文法範疇や品詞などのさまざまなニュアンスが導かれる。

基本的に動詞に最も多いのは、三子音語根である。たとえば、kataba（書いた²⁾）は、K-T-Bの三子音が〈書〉という基本的意味を表わし、[CaCaCa³⁾]という型と融

合すると「書いた」動詞・男性形・単数形・第三人称・完了形という文法的意味が加わる。また、アラビア語の基本文は、動詞文と名詞文とに区別されている。動詞文は、動詞を中心にした文であり、アラビア語がVSO言語である故に、動詞で始まる文であるとも定義される。動詞は、語尾変化によって人称を表わす。動詞文では三人称を除けば、人称代名詞が現われることは稀である。また、アラビア語の場合、「名詞」は、語根と「性・数」を担う文法的な部分からなっている。たとえば、日本語の「学生」という単語をアラビア語に訳す際、その「学生」は、一人なのか二人なのか複数なのか、そして、男性なのか女性なのかという情報が必要になる。

3. 翻訳の授業で頻繁に現れる文法的な誤り

アラビア語を母語とする日本語学習者（特にエジプト人。以下、学習者と呼ぶ。）が日本語からアラビア語に翻訳する際、頻繁に現れる誤りは、大きく文法レベルと語彙・表現レベルに分けられるが、本稿では、前述のように文法上の誤りのみ取り上げ、その原因を考察したい。

日本語はS・O・V型言語であり、それに対してアラビア語はV・S・O型言語である。そのこともあって、多少翻訳の授業を受けたことのある学習者は「日本語の文は後ろから翻訳する」という。確かにアラビア語と日本語の文の構造から見ても、それは事実であるが、この漠然とした規則にこだわりすぎて、翻訳するときに単語を一对一で直訳しようとするネット上に広がっている機械翻訳並みの訳文しか得られない。また、翻訳する際、起点言語（Source Language）のテキストを十分理解し、その内容を忠実に、かつ、目標言語（Target Language）らしさを重視した文章で伝えることが重要である。しかし、学習者の訳す文にはいくつかの誤りの傾向が見られる。まずは、主語がない文を訳すとき、アラビア語の訳文では、主語を「三人称・男性」にすること、日本語の主題文をアラビア語に訳す時、必ず、アラビア語の訳文を動詞で始めること、そして、日本語の文で「受け身形」が用いられている場合に、アラビア語の訳文でも受け身形を使用することである。以下では、この3点について、訳文の例を挙げながら考察したい。

3.1. 主語（動作主）の「人称・性」の問題

アラビア語の動詞文には、人称代名詞が三人称以外に独立形で現れるのは稀であるが、動詞の一部として、必ず人称の「性・数」が明記される。また、アラビア語の動詞の基本形⁴⁾は「三人称・男性・完了」という形で現れるから、日本語の文において、人称を表すはっきりした代名詞がなければ、ほとんどの学習者は、「三人称・男性」の動詞に訳す傾向がある。

たとえば、「レポートを書いた」のような単文でも、学習者は日本語に訳すとき、「彼がレポートを書いた」と訳すことが多い。次の例文1は、「わたしは」という一人称の

代名詞が出現しているため、学習者は、アラビア語に訳す際、問題なく「一人称・単数・完了」の動詞を使用する。しかし、代名詞の「わたしは」が隠れた例文2の場合は、学習者が優先的に使う人称は「三人称・男性・単数・完了」になってしまうことが多い。なお、アラビア語の書字方向は右横書き（右から左へ書く）である。以下のアラビア語の例文の「*」は、訳として誤りであることを表す。

1. わたしは友達に手紙を書きました。

友達	へ	手紙を	書いた・私は
صديق	إلى	خطاباً	كـ تـ بـ ت

2. 友達に手紙を書きました。

(*)

友達	へ	手紙を	書いた・彼は
صديق	إلى	خطاباً	كـ تـ بـ ت

このような主語の人称の問題は、長い文章や文学作品の翻訳の際に頻繁に現れ、テキストへの理解を妨げることがしばしばある。たとえば、下記の例文3と4は、授業で使用した太宰の「待つ」という短編からの例文であるが、主語の人称の誤りが見られる。例文の下に学習者が作ったアラビア語訳を示す。例文3を見ると、「私は」という人称代名詞が出現しているから、学習者は問題なく「一人称・完了」を使用しアラビア語に訳している。

3. 省線のその小さい駅に、私は毎日、人をお迎えにまいります。(太宰治「待つ」)

私は・待つ
私に・行く
 أذهب كل يوم إلى محطة صغيرة للسكك الحديدية الحكومية لأنظر شخصاً ما.

なお、アラビア語では、一人称の場合は男性・女性の区別はないため、例文3では、主語が女性か男性かは問題にはならない。しかし、二人称・三人称になると、女性か男性か主語の性が分からなければ、適切な動詞活用の選択が不可能になる。また、例文3の日本語文では、一人称の代名詞は出現しているが、主語の「性」を表す明確なものはない。

それに対して、例文4は、上記の例文3の続きであり、主語は例3と同様に一人称（「私は」）であるが、主語は独立形で表記されていない。また、原文では改行され、新しい段落から続いている。そのため、学習者は、主語の性と人称に、優先的にアラビア語の動詞の基本形「三人称・男性・単数」を使用してしまう。

4. 市場で買い物をして、その帰りには、かならず駅に立ち寄って駅の冷たいベンチに腰をおろし、...。(太宰治「待つ」)

(*)

彼が・座る	彼が・立ち寄る	彼が・行く
على المقعد البارد ...	بالمحطة و	للشراء من السوق وفي طريق العودة
يـ جـ لـ س	يـ مـ ر	يـ هـ بـ ت

このように、学習者は、人称を表すはっきりした代名詞がなければ、「三人称・男性」の動詞に訳す傾向がある。①の主語の人称・性の問題は、学習者の母語の影響によるものと考えられる。

ところで、アラビア語でも、「私」という一人称の独立形は現れるのが稀である。これは、文法的な規則ではなく、「私」を使用すると自分を主張するとされるので好まれないという人間関係や待遇的な理由、すなわち、アラビア語的な視点と言えるものである。また、アラビア語における人称代名詞の独立形の使用をめぐる、亀井孝他編『言語学大辞典』(1988 : p.470)は、次のように指摘している。

アラビア語の動詞の主語は、動詞の活用接辞がすでに表わしているから、自立語で明示されるのは、3人称についての補足的説明か強調のためである。

しかし、動詞の語尾変化活用では非分離形代名詞として人称は明確にされなければならない。そのため、翻訳を指導する際にアラビア語における人称表記の問題や、日本語における主語の人称に関する問題を「日本語の視点」として考慮した解説が必要不可欠である。たとえば、森田(1995 : p.3)は「かつて、ある言語学者は『日本語は人間不在の言語である』と述べたと指摘しているが、日本語には「主語」らしきものは登場しないものも多く、学習者がそのような文を翻訳する際は戸惑うことは少ない。森田氏は、「まもなく名古屋です」や「ボタンが取れちゃった」のような例を挙げながら、「日本語は表現・理解すべてにおいて、話し手・聞き手が常に「自分」という言葉のやり取りの主体者となって影のように付きまとっているが、話の中身に入っていない」と主張している。翻訳を勉強する学習者にこのような日本語文法の「視点的な」面を理解してもらう必要がある。要するに、正確に翻訳ができるようになるためには、文法の形式的な規則への理解だけでは不十分であり、文法形式の意味的な面と視点的な面への理解が必要不可欠であると言える。

主語がない文は、「レポートを書いた」のような文では誰が書いたのか、あるいは、「うらやましい！」のような表現では、誰が誰を「うらやましく思っている」のかと学習者が戸惑うわけだが、主語が文脈依存になることについて例を挙げながら解説していく必要はある。

たとえば、翻訳指導の際に、日本語の場合は、独立形の人称代名詞が出現していないとき、人称は、叙述文の場合「一人称」、そして、疑問文の場合は「二人称」が優先されると基礎的な文法規則が身に付くまで常に認識させる必要がある。また、人称の性を表す明確な言語的な形式がなければ、状況や場面を解釈する力を付けなければならないが、この場合は、勿論個々の語への理解や社会的な特徴への理解も必要である。

3.2. 文の語順と主題の位置

前述のようにアラビア語はV・S・O言語であり、その動詞文は動詞で始まるという語順が基本的である。また、亀井孝他編『言語学大辞典』（1988：p.470）では、アラビア語の統辞について次のように述べている。

文は、述語たる動詞で始まる動詞文と、主語または述語たる名詞で始まる名詞文とに分類される。動詞文の語順は、原則として動詞＋主語＋目的語で、この構造は、接尾人称代名詞をとった完了形動詞にも反映している。例）rahim-tu-haa（憐れんだ－私は－彼女を）

上記のようにアラビア語の動詞文の基本的な語順は「動詞＋主語＋目的語」である。例文5はごく普通の動詞文の例であるが、例文の6のアラビア語訳から分かるように、文が長くても、述語たる動詞が文の最初に来るのが原則である。

5. 太郎はリンゴを食べた。

リンゴ	太郎	食べた・彼は
تفاحة	تارو	أكل

6. こんどこそ生きたいように生きるのだと、勇躍して、じかに生活へとび込む希望と好奇心に満ち溢れて、太平洋を渡ったのであった。（宮本百合子「母」）

こんどこそ	المحيط الهادي يملمني الأمل وفضول أن أستغرق مباشرة في تلك الحياة وأن أحيأ كما أريد في هذه المرة.	渡った・私は
عبرت		عبرت

（近代文学短編集(2)「母」）

このような規則からも、日本語がS・O・V語順であるということからも、日本語をアラビア語に訳すときは「後ろから翻訳する」という暗黙の規則が出来てしまっている。しかし、そのような規則に当てはまらない例は少なくない。アラビア語では、原則としては「V・S・O」の語順であるが、地域や表現技法によっては、主語が動詞の前に来ることもあり得るのである。

さらに、日本語の「主題文」の場合は、アラビア語に翻訳する際、主題に当たる名詞句を文の初めに持ってくるのがより自然である場合が多い。たとえば、以下の例文7は、太宰治の「父」という短編小説からの文であるが、学習者は、Aのように日本語文の述語動詞を文頭にして訳している。しかし、自然なアラビア語訳は、出版されている短編集に挙がっている訳文Bのように主題を文頭にした訳である。

7. 義のために、わが子を犠牲にするという事は、人類がはじまって、すぐその直後に起った。

(学習者の訳文)

義のために	わが子を犠牲にすること	人類	はじまって、すぐその直後	起った
من أجل إحقاق الحق	التضحية بالأبناء	تاريخ البشرية	بداية فور	حدثت

 - A

人類	始まって、すぐその直後	起った	義のために	わが子を犠牲にすること
تاريخ البشرية	بداية فور	حدثت	من أجل إحقاق الحق	إن التضحية بالأبناء

 - B

(近代文学短編集(1)「父」)

授業では、上記の例文7を学習者が訳せるように、まず、個々の語や表現に対応するアラビア語を選定し、語と語の関係と語順を学習者に考えさせ、訳文を作らせるという順序をとった。その結果、ほとんどの学習者はAの訳文のように「動詞で始まる文」という語順で作成した。Aの訳文を見ると、文法的には間違いでないが、日本語の文で「は」で表現されている主題の機能はアラビア語の文では伝わらない。すなわち、作家は「義のためにわが子を犠牲にすること」を主題として焦点を当てて「は」で表現しており、その短編を最後まで読めば、「義のためにわが子を犠牲にすること」が作品全体の趣旨を表していることが分かる。従って、アラビア語の訳文でも、その趣旨を強調し、文に含意されているニュアンスを正確に伝えることが望ましく、かつ必要であると思われる。

それに対して、Bの訳文では、「ʔinna (إن) ⁵⁾ ⁶⁾ という強調もしくは取り立てを表す小詞(以下、取立詞と呼ぶ)の後に主題である「義のために、わが子を犠牲にすること」に相当するアラビア語が来る。そして、その後に「動詞(起こった)」が来ている。従って、訳文Bで「ʔinna (إن)」を用いることによって主題に焦点を当てることができ、日本語の文のニュアンスが正確に伝わると考えられる。しかし、Aの訳文のように文を動詞で始めると、ごく普通の叙述文になり、「義のためにわが子を犠牲にすること」の部分に焦点が当たらず、主題の働きが機能しない。

また、次の例文8も同様に主題で始まる日本語の文であるが、それに対応するアラビア語の訳文では、名詞句が主題の位置を占め、その後に動詞で始まる文が来るという主題を取り立てる語順になっている。例文8の場合は、指示代名詞「haḏa (هذا)」を用いて名詞句を主題として焦点を当てている。

8. この長い歴史は、長期にわたる繁栄と偉大な業績のあと、短期間の外国からの支配も受けた停滞と衰退の時期が続くというサイクルを繰り返しました。(Luxor)

衰退	停滞	短期間	のあと	偉大な業績	繁栄	長期	に渡る	繰り返した	長い歴史この
والضعف	من الركود	أوقات قصيرة	يعقبها	والإنجازات العظيمة	من الإزدهار	فترات طويلة	خلاله	تكررت	؛ هذا التاريخ الطويل

外国の	支配	受け
إثر	إحتلال	أجنبي

以上の例文7と8では、**主題**で始まる日本語の文とそれに対応するアラビア語訳文を見たが、日本語の文が**動詞文**でも**主題**で始まる場合、原文の作者の意図と文章のニュアンスを正確に伝えるため、訳文も**主題**たる部分を取り立てる必要がある。しかし、学習者は、アラビア語の基本的な動詞文の語順のみに縛られて**主題**を**主語**と同じ扱いをしているため、動詞で始める傾向が見られるのである。このように、②語順と主題の位置に関する誤りは、アラビア語の母語の影響であると思われる。

このような誤りの基本的な原因は、初級文法を導入する際、「主語」と「主題」との違いについての解説が十分に行われていないことと、日本語の「主題」と母語であるアラビア語との対応の形式について全く触れないことにあると思われる。また、アラビア語にも**主題**を取り立たせる文法形式は先に見た「取立詞」の「ʔinna」や指示代名詞、その他の表現形式があるが、まだ十分な研究が行われていない。その対応の様子を明らかにする両言語間の対照研究が必要不可欠であると言える。

3.3. 受身形の訳し方

日本語の文に受け身形が使われることが多いが、その場合、アラビア語の訳も無理やり受け身にしようとする学習者がほとんどである。しかし、そうすると不自然で、ぎこちないアラビア語表現になってしまう場合が少なくない。従って、日本語の受け身形の表現を翻訳する際、注意すべき点が多々あると思われる。

例えば、以下の例文9の場合は、アラビア語の訳文でも受け身形が自然な表現である。それに対して、例文10の訳文は不自然と感じられる。例文10に対する学習者の訳文がA、その訂正の訳文がBである。

9. 昨年、大阪で国際会議が開かれた。

昨 年	大 阪	で	国 際	会 議	開 け だ せ ぬ
العَامَ الْمَاضِي	أُوسَاكَا	فِي	دَوْلِي	مُؤْتَمَر	أَقِيم

10. 日本の父親たちは、誰からも**尊敬され**ないし、その仕事が**評価される**こともない。

その仕事	評価される	ない	誰からも	日本の	父親	尊敬される	ない
عَمَلُهُمْ	يُقَدَّر	وَلَا	مِنْ أَحَدٍ	الْأَبَاءِ	الْيَابَانِيِّينَ	يُحَدَّرَم	لَا

 A

評 価	その仕事	受けること	ない	誰からも	尊 敬	得 る こと	ない	日本の	父親
تَقْدِيرًا	عَمَلُهُمْ	يَلْقَى	وَلَا	مِنْ أَحَدٍ	بِاحْتِرَامٍ	لَا	يَحْظُونَ	الْأَبَاءِ	الْيَابَانِيِّينَ

 B

以上の例文10は、翻訳の授業で使ったものであるが、学習者のほぼ全員が訳文で「受け身形」を使用した。その結果、訳文のニュアンスが日本語のそれと大きく変わってしまう。例えば、「尊敬されない」「評価されることもない」をアラビア語文で受け身形で表現すると、「父親」の存在そのものが「尊敬に値しないものである」というようなニュ

アンスが付加されてしまう。アラビア語では、「本来尊敬に値するものが然るべき尊敬を受けない」、「評価されるはずのものが評価されない」という意味を表す場合は受け身形ではなく、「尊敬を得ることはない (「lā yaḥẓa biḥtiram لا يحظى باحترام) と、「評価を受けない (「lā ya lqa taqdyr لا يلقى تقدير) のように訳すことによって、日本語の文にあるニュアンスを伝えることができると考えられる。

一方で、アラビア語では受身形が自然であるが、日本語に訳すとき、受け身形を使用しない方が日本語として自然な文になる例もいくつか見られる。たとえば、三田 (1972) は、アラビア語を日本語に翻訳したものであるが、日本語で受け身が使われていない例が多く見られる。

11.

僅か	しか
إِلَّا قَلِيلًا	

楽しませられる	ない
لَا تُمَتِّعُونِ	

それなら
وَأِذَا

あなたがたは隙の間を楽しむ丈である。(33章-16節)

12.

欲	望
الشَّهَوَاتِ	

愛好
حُبُّ

人間に
لِلنَّاسِ

装飾された
زُيِّنَ

様々な欲望の追求は、人間の目には美しく見える。(3章-14節)

13.

僅か	しか
إِلَّا قَلِيلًا	

知識	から
مِنَ الْعِلْمِ	

与えられた	ない
أَوْ تِيْتُمْ	وَمَا

(人びとよ) あなたがたの授かった知識は微少に過ぎない。(17章-85節)

以上の例文 11~13 は、全てアラビア語の原文では受け身形の動詞で表現されているのに対して、日本語の訳文では受け身形が使われていない。例文 11 の原文で使用されている動詞は、「あなた方は・楽しませられる (「tumattaʿuwna) تُمَتِّعُونَ」例文 12 では、「彼らには・装飾された・美しく見えるようにされた (「zuyyna) زُيِّنَ」例文 13 では、「あなた方は・与えられた (「ʾuwtiytum) أُوتِيْتُمْ」になっている。ここでは、原文の各例文において受け身形が使用される理由について言及しないが、受け身形の使用目的が両言語において異なることが明らかである。以上のことから、③受け身形の訳し方に関する学習者の誤りは、日本語とアラビア語の違いによるものであると考えられる。

ここで、日本語とアラビア語の受け身形について、見ていきたい。山下 (1997 : p.4) は、受け身の教授法の問題点について論じる中で、直接受け身の場合は動詞によって行為者を表す格助詞が変わり得ると指摘し、元々の動詞の意味から、「授受動詞」「感情に関する動詞」「生産・破壊に関する動詞」を挙げている。日本語の直接受け身をアラビア語に訳すとき、「尊敬される・愛される・嫌われる」などのような感情や評価を表わす動詞は受け身で表現しにくい傾向が見られるが、このことについても詳しい研究が必要である。

日本語の場合は、動詞で表される行為・動作の影響を受ける対象（目的語）に焦点を当てる目的で受け身文が使用されることがあるが、アラビア語の場合は、その目的での受け身文の使用はほとんど見られない。Abdelfatah（2006）では、アラビア語の場合は、動詞で表される行為・動作の「恐ろしさ・偉大さ・軽蔑」を表すために受け身形が使用されることが多いと述べている。また、動詞で表される動作・行為を行う動作主を「曖昧にすること」動作主が「不明であること」あるいは、韻を踏むなどのために動作主を省略する必要があるときにも受け身形が用いられると指摘している。以上のことから、日本語とアラビア語の受け身形の使用目的には、ズレがあることが分かる。しかし、具体的にどのような相違点があるかは両言語の間の詳しい対照研究が必要である。また、両言語において受け身表現によって付加されるニュアンスの違いを明らかにする研究も有意義であると考えられる。

4. 翻訳の授業を効果的なものにするために—指 導 案—

以上、学習者が翻訳の授業でよくする誤りや翻訳作業において困難な点を文法的な面から見てきたが、ここでは、上記のような文法的な誤りを回避し、日本語教育の促進につながる指導案を検討したい。

現在の翻訳の授業では、教師が課題を決定し、学習者に語彙・表現・文法の難しい点を解説して翻訳作業にかかるという順序で行われる。そして、多くの場合は、文法形式の決定にしても多義語の訳語の選択にしても感覚やセンスに頼りがちなところがある。しかし、アラビア語と日本語のそれぞれの言語の特質・発想の違いを明確にする要点を押さえて、それを学習者に翻訳作業をしながら実感させておくと、翻訳だけではなく日本語学習にもより効果的であると考えられる。例えば、本稿で取り上げた文法上に見られる誤りを学習者に認識させるために、文法形式だけでなく、その形式や文の構造に潜む意味や視点まで、認識させることも必要不可欠である。そのためには、総合的で具体的な指導案が欠かせないと思われる。

エジプトのほとんどの大学では翻訳の科目は一学期（14週間）にわたって、週一回3時間の授業というコースが設けられている。その授業を翻訳のスキルや日本語能力の向上にも有効に使うために計画を立て、実践とともに、理論的に両言語の特徴を取り上げる時間も設ける必要がある。

その過程としては、まず、翻訳作業の実践に使うテキストを決定する際、経済・政治・社会・文化・文学的なものなど様々な分野に広げて訓練させ、各分野におけるテキストの特徴と扱い方を学ぶことが重要である。そして、実践に入る前に、本稿で取り上げた両言語の問題点を認識させるために、「翻訳理論と翻訳スキル」の講義を少なくとも2回ほどする必要があると思われる。その講義では、本稿で取り上げた問題を処理するた

めに次のように解説をする。

まず、本稿で取り上げた①主語の人称・性の問題と、②語順と主題の位置に関して、日本語のディスコースにおける主題および主語の提示の仕方を学ぶため、「文の主題が次の文にもおよび、同じ主題が続いているときには、その主語／主題は明記されず、主題の転換が「～は」で示されている」などのようなことに気付かせる。また、日本語の視点についても言及し、たとえば、小説においては「話は主人公となる人の視点から述べられるのが普通で、そのために主人公が主題になることが多い」ことや、「主人公が主語や主題になる場合、そのことが明記されないことが多い」などのようなことを示す例をたくさん見せる。

例えば、筆者は、ネット上で検索できる三田（1972）の『聖クルアーン日亜対訳』を用いて主題文と受け身形の用例を集めて、授業で使っているが、その対訳からは、日本語の主題文には、アラビア語の「取立詞」の「ʔinna」や「指示代名詞」などの文法形式が対応する傾向があった。このように日本語の「主題」に対応するアラビア語表現形式を考慮した解説を導入すれば、より正確な理解を得られ、「主題」についての理解の促進につながると考えられる。

また、③受け身形の訳し方についても用例を挙げながら、その使用における両言語の間に見られるズレを強調するのも適切である。例を挙げながら、「受け身形」の使い方はアラビア語と日本語の間に必ずしも一対一対応しているものではないということを認識させることが必要であろう。以上のような内容で「翻訳理論と翻訳スキル」の講義を行い、その後、多数の例を挙げて翻訳のトレーニングを行うことが必要であると思われる。

5. まとめと今後の課題

以上のように日本語からアラビア語に翻訳する際によく見られる文法的な誤りを見てきたが、その原因は、学習者の母語の影響のものと日本語とアラビア語の違いのよるものに分かれることが明らかになった。たとえば、①の主語の人称・性の問題と②の語順と主題の位置に関する誤りは、学習者の母語の影響によるもので、③の受け身形の訳し方に関する学習者の誤りは、日本語とアラビア語の違いによるものであると考えられる。また、本論で取り上げた問題点以外にも、使役表現・使役受身表現・文と文を接続する表現や話題を転換するための表現など、問題になる点が多々あるが、可能な限り多くの問題点について学習者に認識させることが有効であると考えられる。そして、日本語とアラビア語の言語としての構造や発想の違いや両言語の背景にある文化、考え方、物の見方を十分に咀嚼した教材の開発も必要であろう。翻訳者養成のためだけでなく、よりよく日本語と日本語の視点への理解を深めるためである。

本稿で取り上げた問題には、それぞれ対照言語学の面からまだまだ研究の余地はある

が、学習者にそれぞれの問題を個別に認識させることは、翻訳だけではなく日本語学習において有意義であると考えます。そして、最後に、翻訳の授業を担当し、学習者に翻訳の実践を指導した経験から日本語・アラビア語の平行コース構築の重要性を痛感しているが、この点については、今後の課題としたい。

注

- 1) 3つの大学は、開設の古い順に記載しており、「カイロ大学文学部」は1974年、「アイン・シャムス大学外国語学部」は2000年、「ミスル科学技術大学言語翻訳学部」は2005年開設である。
- 2) アラビア語動詞の基本形は、男性形・単数形・第三人称・完了形という形であるため、日本語の訳は「タ形」であげる。
- 3) 大文字の「C」は、任意の子音を表す。アラビア語のアルファベットは28文字で、全て子音である（中には、「w・y」など、子音の働きを持つ、半母音とされるものがある）。母音は「a・i・u」であり、母音を表記する際には、28文字の子音アルファベットに母音符号を付して用いる。
- 4) 基本形とは、「アラビア語-アラビア語」辞典に見出し語として掲載されている動詞の形である。すなわち、ある動詞の意味を辞典で引く際、その動詞を「男性・単数・三人称・完了形」という形に戻して検索する。
- 5) アラビア語における「ʔinna (إنّ)」は、文頭に主語となる名詞の前に位置し、文の叙述内容の強調、もしくは「取り立て」の意味を表すため、日本語の取り立ての「は」に相当する機能がある。
- 6) 本稿ではアラビア語表記にIPA (International Phonetic Alphabet) を使用している。

参考文献

- 亀井孝他編 (1988) 『言語学大事典』第1巻 (世界言語編) 上 「アラビア語学史」三省堂
- 高見健一 (1995) 『機能的構文論による日英語比較』くろしお出版
- 長沼美香子 (2005) 「大学における「翻訳教育」の事例—翻訳理論を応用した試み—」『通訳研究』No.5
- 能登恵一 (1999) 「外国語教授法—テキスト理解に関する一考察」『言語と文化の諸相』岩手大学人文社会科学部
- 森田良行 (1995) 『日本語の視点』創拓社
- 山下好孝 (1997) 「「受け身」教授法の問題点」『北海道大学留学生センター紀要』第1号
- Abdefatah・Mohamed (2006) 「動詞の受け身形—その重大さ・用語・使用目的—」

『ダマスカス大学紀要』22号 pp.17-70

Jakobson, Roman (1959/2004). 'On linguistic aspects of translation'. In L. Venuti (ed.). (2004). The translation studies reader. 2nd edition. London & New York: Routledge.

用例引用資料

太宰治「母」、「父」『太宰治全集 9』ちくま文庫、2012年発行

太宰治「待つ」『太宰治全集 5』ちくま文庫、1989年発行

三田了一（1972）『聖クルアーン：日亜対訳・注解』（abu版）日訳クラーン刊行会

<http://www2.dokidoki.ne.jp/islam/quran/quran000.htm>（最終閲覧日 2014. 12. 31）

Luxor「エジプトを楽しめる総合サイト」（最終閲覧日 2014. 12. 31）

http://www.luxor-co.com/category/the_general_condition/the_history.shtm

宮本百合子「母」『宮本百合子全集 第十七巻』新日本出版社、1981年初版発行

ワリード・イブラヒム訳『近代文学短編集(1)「父」』アラビア語訳、アル-ア-ラミヤ、カイロ、2013年

ワリード・イブラヒム訳『近代文学短編集(2)「母」』アラビア語訳、アル-ア-ラミヤ、カイロ、2015年発行予定

（わりーど・いぶらひむ 1999年度博士後期課程単位取得退学

2000年度博士後期課程修了／Associate professor Cairo University）